



第11回企画展(会期:平成24年10月30日(火)～平成25年1月14日(月・祝))

発掘された筑紫万葉の世界

—万葉歌の詠まれた古代筑紫の世界—

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

はじめに

万葉集は、奈良時代、当代を代表する歌人であった大伴家持によりまとめられたといわれています。収載の和歌は約4500首を数え、その中には筑紫ゆかりの歌が300首以上収められています。

今から1300年前、この地では万葉筑紫歌壇が開き、筑紫の風物や望京の想い、愛する人との別れを詠んだ数多くの秀歌が誕生しました。その筑紫歌壇の中心人物は、家持の父である大宰帥の大伴旅人と、筑前守として赴任していた山上憶良でした。その創作の舞台となった大宰府の地には、旅人が長官として赴任した大宰府政庁、沙弥満誓が造営を推し進めた観世音寺、憶良が旅人とその亡き妻へ贈った歌に詠まれた大野山(大野城)、旅人が愛する児島との別れを惜しんだ水城等が史跡としてあります。

第一章 官人の悲哀

やすみしし 我が大君の 食す国は
大和もここも 同じとぞ思う 大伴旅人
(天皇が治められる国は、大和でも筑紫でも同じだ
と思う。) 巻第6-956

わが盛り またをちめやも ほとほとに
奈良の都を 見ずかなりなむ 大伴旅人
(年の盛りが再び返ってくるであろうか。奈良の都を
見ずに終わるのではないだろうか。) 巻第3-331

筑紫万葉歌壇を主宰した大伴旅人が詠んだ二首の和歌です。彼は、貴族の家柄に生まれ、朝廷の要職につき、また征隼人大將軍としても活躍しました。一首目は旅人が大宰帥就任の意気込みを宣言したもの、二首目は帰京できない不安を切々と詠んだものです。

都の貴族や役人にとって、大宰府赴任は、故郷や親しい人々から遠く離れ、西辺の地に赴くことを意味していました。ある者にとっては実績を積み中央政界で活躍するための階梯であり、ある者にとっては都から遠ざけられ地方暮らしを強いられる苦難でした。旅人の大宰府赴任は、藤原氏の陰謀による左遷とする見方と、大伴氏と筑紫との深い関わりを下地として隼人征討の実績や官位相当に基づく順当な人事とする理解があります。

第二章 梅花の宴

わが園に 梅の花散る ひさかたの
天より雪の 流れ来るかも 大伴旅人
(わが庭に梅の花が散る。天から雪が流れて来るの
だろうか。) 巻第5-822

梅の花 散り紛ひたる 岡傍には
うぐひす鳴くも 春かたまけて 榎氏鉾麻呂
(梅の花の散り乱れている岡の辺りには、鶯が鳴く
よ。春を待ち受けて。) 巻第5-838

天平2年(730)正月13日、大伴旅人邸において、大宰府や西海道諸国の役人が集い、梅花の宴が催されました。中国の書聖・王羲之の蘭亭の詩会を意識したものであり、都の政争とは一線を画し、風雅の世界に居ようとする旅人の想いがうかがわれます。この日、32人が中国渡来の高貴な花とされる梅花を主題に作歌を繰り広げています。「わが園」ではじまる和歌は、主人である旅人が我が庭で咲き散る梅の花を雪に見立てて詠んだものです。旅人が「わが園」と呼ぶ帥の館はどこにあったのでしょうか。旅人の邸宅が岡の辺にあったことは、榎氏の歌にみえる「岡傍」の表現からもうかがわれます。大宰府政庁跡の西北、蔵司の丘に連なる坂本八幡宮を想定する説が戦後出され伝承化し、近年では政庁跡の東、月山の丘陵に接する月山東地区官衙に比定する説も有力視されています。



「食す国」の歌碑
(大宰府政庁跡前)



「あをによし」の歌碑
(大宰府政庁跡前)

第三章 観世音寺の造営

あをによし 奈良の都は 咲く花の
 薫ふがごとく 今盛りなり 小野老
 (奈良の都は、咲く花の美しく薫るように、今が真
 っ盛りである。) 卷第3-336

しらぬひ 筑紫の綿は 身につけて
 いまだは着ねど 暖けく見ゆ 沙弥満誓
 (筑紫の綿は、まだ身につけて着てはいないけれ
 ども、暖かそうに見える。) 卷第3-328

観世音寺は、天智天皇が百済救援のため筑紫で亡く
 なった斉明天皇のために建立したお寺といわれています。
 その完成には長い歳月がかかり、沙弥満誓が造観
 世音寺別当として派遣されます。

満誓の「筑紫綿の歌」は、小野老の「あをによし」の歌
 からはじまる都を讚美し、望郷の念に暮れる歌宴にあ
 って、筑紫のすばらしさを真綿まわたに代表させて詠い上げ
 たものといえます。九州の特産物であった真綿は中央
 での大寺院の造営や写経事業の財源とされており「府
 大寺」と称された観世音寺の造営にも充てられた可能
 性があります。筑紫の綿は、いにしえ人の体や心だけで
 はなく、国家の懐も暖めるものでした。

第四章 大野山と水城

大野山 霧立ちわたる 我が嘆く
 おきその風に 霧立ちわたる 山上憶良
 (大野山に霧が一面に立ちこめる。私が嘆くため
 息の風によって霧が立ちこめる。) 卷第5-799

ますらをど 思へる我や 水茎の 水城の上に
 涙拭はむ 大伴旅人
 (丈夫と思う私が、水城の上に袖で涙をふくことだ
 ろうか。) 卷第6-968

筑紫で詠われた万葉歌の中には、別れを主題とした
 ものが多く見受けられます。

憶良の「大野山」ではじまる歌は、大宰府赴任後まも
 なく、最愛の妻を亡くした大伴旅人の深い悲しみを思
 い、旅人になりかわり詠んだ歌です。「大野山」とは、万
 葉集で「大城山」とも詠われ、古代山城の大野城が築
 かれた四王寺山のことで

次の「水城」の歌は、帰京する旅人が、愛しい娘子・
 児島の見送りに応えて、彼女との別れのつらさを詠ん

だものです。防衛施設として築かれた水城が、当時の
 人々にとって、大宰府とその外とを分かつ境界として意
 識され、送別の場とされたことを示しています。

第五章 貧窮問答歌の世界

… 寒くしあれば 堅塩かたしおを 取りつづしろひ
 糟湯酒かすゆざけ うちすすろひて …
 (寒くてたまらなければ、焼き固めた堅い塩をちび
 ちび食べては、湯に溶いた酒粕をすすり。)

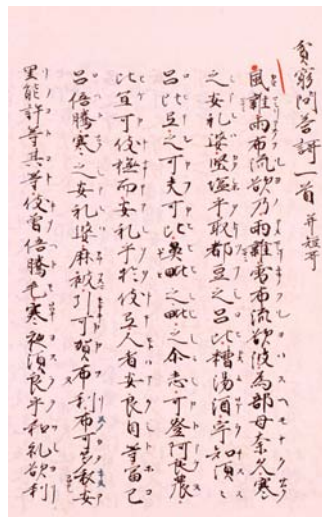
かまどには 火気吹き立てず 甑こしきには
 蜘蛛くもの巣かきて 飯炊く ことも忘れて…

山上憶良

(竈かまどには煙も吹き立てず、甑こしきには蜘蛛の巣を懸け、
 飯米を蒸すことも忘れ果て。) 卷第5

山上憶良が筑前守として赴任したのは、神亀3年(726)頃といわれています。しかし、彼が筑前に来たのは、これが初めてではなく、大宝2年(702)に遣唐使として筑紫から唐へ旅立っています。万葉筑紫歌壇が放つ異彩は、憶良が入唐経験で得た高い教養にならび、旅人の存在により生成されたものともいえます。

憶良の代表作である貧窮問答歌ひんきゆうもんどうかは、彼が筑前守在任中、農民達の貧困の状況を見聞することで生まれた作品です。堅塩を肴に糟湯酒をすすする男と、竈を使って炊く米すらない貧窮者との問答という形式で歌われています。憶良はこの長歌のなかで、世の中の貧窮の実態、さらには生きる苦しみのひとつとして貧窮困苦を描こうとしました。(学芸調査室 松川博一)



「貧窮問答歌」

(万葉集西本願寺本(複製)
 太宰府市文化ふれあい館所蔵)



「大野山」の歌碑(国分天満宮)



「筑紫の真綿」の歌碑(観世音寺)



編集 発行: 平成24年10月30日

九州歴史資料館
 KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
 TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
 URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>